報　告

日本鉄鋼協会中国訪問学術使節団報告

1. はじめに

中国との学術交流は日本鉄鋼協会として待望の課題であつたが，中国金属学会から公式の招待をうけ，日本鉄鋼協会学術使節団が 1979 年9月 22 日(土)から 10 月 5 日(金)まで 14 日間中国を訪問した．

1979 年3月下旬に，北京鋼鉄学院の招きで訪中した東京工業大学後藤和弘助教授が，中国金属学会関係者と会談した際に，シンポジウム開催を含めた両国の学術交流について意見の交換が行われたのが緒口となつた．

本会では理事会の承認を得て，学術技術の交流を通じ相互の理解と親善を図るために，代表団派遣の用意があることを中国金属学会に伝え，訪中の時期，日程，代表団構成など具体的なとりまとめが，周栄章北京鋼鉄学院教授と後藤助教授の協力で急速に進められた．

その結果中国金属学会から 1979 年7月 22 日付で，1979年9月 22 日から 10 月5の間日日本鉄鋼協会代表団を招きシンポジウム開催についての協議ならびに代表団による数件の講演を中心とした呉路青副秘書長署名の招待状を受領した．

今回の中国訪問の最大の目的であつたシンポジウム開催に関する協議は，3回に亘つて会議が持たれ，なごやかな雰囲気の中で相互の立場を理解し忌憚のない意見の交換を行つた結果「鉄鋼学術会議共同開催に関する協定」の締結調印をし，さらにシンポジウムを第1回 1981 年9月上旬北京，第2回 1983 年東京で開催することを決定した．また，会談の席上，中国金属学会代表団を1980年始めに日本に招待する意向であることを伝え，中国金属学会から喜んで招待を受ける旨回答があつた．

代表団は北京，瀋陽，鞍山，杭州ならびに上海を訪問し，大学・研究所・工場等で多くの人々に会い話合いの機会を得たが，各訪問先で担当業務に真摯に従事している姿勢に感銘をうけた．そして訪問各地で心温まるもてなしと細心の配慮に接し団員一同の感激はひとしおであつた．

代表団の中国滞在中の全日程を滞りなく終え，多くの成果を挙げることが出来たのは，周到なる準備をいただいた中国金属学会の葉志強理事長，劉克剛副理事長，張文奇副理事長，幹部ならびに関係各位のご努力の賜と感謝するとともに，代表団の旅行に随行いただいた，付君詔副秘書長，周栄章教授，黄協浦通訳の三氏に対し深甚の謝意を表する．

今回の日本鉄鋼協会学術使節団の中国訪問が，日中両学会相互の理解を深め，緊密な連繋と交流の促進に寄与することを確信し，併せて中国金属学会の発展を祈念する次第である．

(日本鉄鋼協会学術使節団長　田畑新太郎)

2. 代表団と日程

代表団の構成と日程について下記に記す

1)　代表団

代表団は次の9名で構成された．

団長	田畑新太郎	日本鉄鋼協会専務理事
	田畑智世枝	
	松下　幸雄	日本鉄鋼協会副会長 東京大学工学部金属工学科教授
	松下三余子	
	中川　龍一	日本鉄鋼協会研究委員長 金属材料技術研究所工業化研究部長
	中川　チイ	
	田中　良平	日本鉄鋼協会編集委員長 東京工業大学金属工学科教授
	後藤　和弘	東京工業大学金属工学科助教授
	佐藤　公昭	日本鉄鋼協会業務部長

2)　日程

(1)　概略

日程ならびに各訪問先の内容の詳細は別記の通りであるが，概略と印象について次に記す．各地域での中国側面接者名を後記した．

9月 22 日(土)　15：35 CA 926　便で成田を出発，19：40 に北京空港に到着，空港で中国金属学会王之璽，呉路青，付君詔，周栄章，林从煥氏らの出迎えをうけ，挨拶の後，冶金工業部の車で宿舎の民族飯店に直行した．場所は天安門の西側復興門大街の目抜通りで隣に民族文化宮がある．外国人旅行者と日本をはじめ各国の北京駐在者の宿舎にもなつている．

民族飯店到着後，周栄章教授，黄協黄通訳から滞在日程の説明を聞き，訪問先などのスケジュールの詳細な打合せを行つた．また婦人のための見学コースが用意されていた．

中国金属学会招待宴

9月 23 日(土)は万里長城，明の十三陵の見学が行われた後，夕方中国金属学会による歓迎宴が開催された．場所は北京市の中心街で故宮と隣合せの位置にある北海公園の中にある「仿膳飯庄」であつた．中国金属学会から劉克剛，張文奇両副理事長，王之璽，呉路青，付君詔，邵象華，全鉞嘉，周栄章，李春富，黄協浦の 10 名が出席した．

開宴に先立ち劉副理事長から歓迎の挨拶と中国出席者の紹介，続いて田畑団長から代表団招待に対する謝辞と団員の紹介があつた後，二卓に分れ茅台酒と葡萄酒で盃

を交わし，美味な料理に舌鼓みをうち歓談した．

中国金属学会との会談

9月 24 日（月） 8：30 に冶金工業部内にある中国金属学会を訪問，田畑団長から団員の紹介があつた後，婦人は別途の見学コースに向つた．始めに田畑団長の講演があり「日本鉄鋼協会の紹介」を行つた．

引続いて会議に入つた．会議は9月 24 日(月)，25日(火)， 26 日(水)の3回，中国金属学会会議室で行われた．中国側出席者は日毎に多少の異動があつたが次の方々である．

王之璽，呉路青，付君詔，劉嘉禾，邵象華，周栄章，林从煥，李万林，そして通訳は黄協浦，肖永誠，佟朋娟の三名が担当した．

議題は鉄鋼学術会議開催に関する協定の検討と，これに基づくシンポジウムについての協議であつた．

第1議題の鉄鋼学術会議については，中国金属学会から提案された協定案を基に意見の交換を行つた結果，

1．会議は2年毎交互に開催し，第1回は 1981 年9月上旬に北京，第2回は 1983 年に東京で開催する．
2．提出論文は毎回双方各 10 件とする．
3．会議の共通用語として英語を使用する．
4．会議への派遣人数は 20 名以内とする．
5．論文集の編集発行は開催国が担当する．

他に，会議開催の準備，滞在費の相互負担など全部で9項目について合意し，協定書を作成9月 27 日に調印することとなつた．

第2議題のシンポジウム開催については，1981 年の第1回，1983 年の第2回シンポジウムの具体的な事項について協議した．その結果，

1.第1回，第2回は製鋼に関する会議とする．
　第1回会議のテーマは1）製鋼物理化学，2）溶銑の予備処理と炉外精錬，3）平炉，酸素上吹転炉，Q-BOP およびその他の方法の実際的諸問題，4）鋼の凝固に関する理論ならびに実際的諸問題
2.会議の準備は中国金属学会は責任者付君詔副秘書長幹事周栄章教授，唐仲和技師が担当する．日本鉄鋼協会は責任者松下幸雄教授ならびに田畑団長以下全団員で準備会を構成する．
3.第1回会議の参加者は日本 20 名，中国 80 名を予定する．

他に会期（4日間），論文の相互交換，会議運営の問題など7項目の決定がされた．

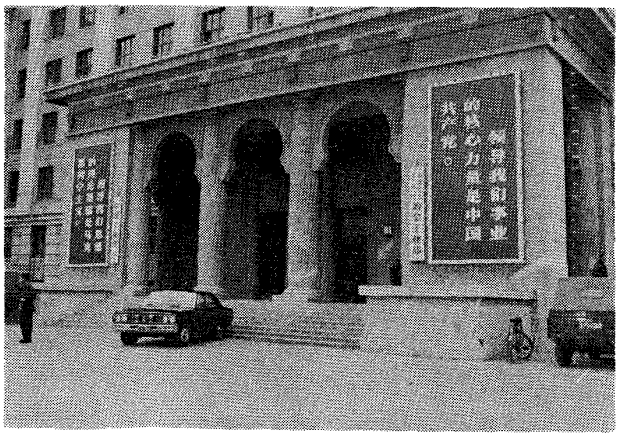
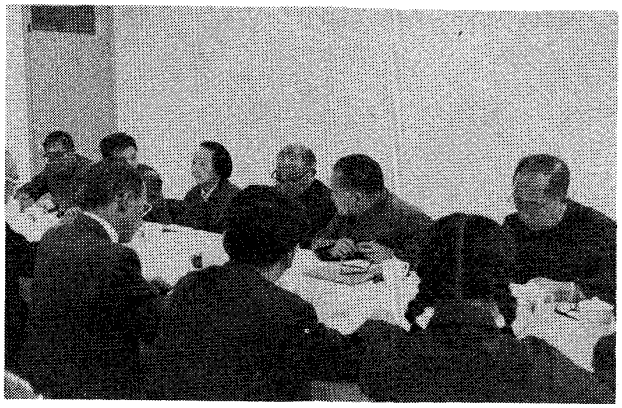


写真1　中国金属学会との会談の行われた冶金工業部庁舎



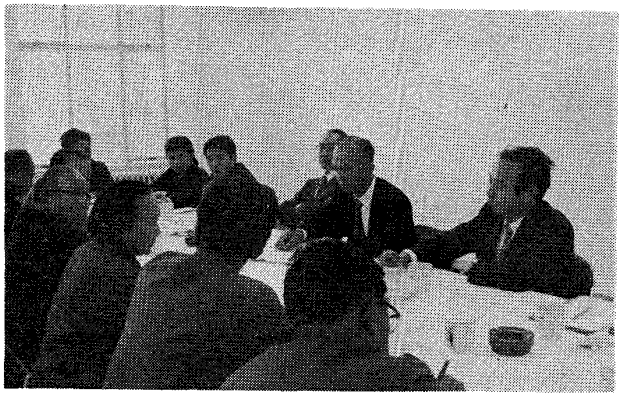


写真2　会議中の両国代表
上．右から付君詔，邵象華，王之璽．呉路青，1人おいて林从煥の諸氏
下．右から後藤，田畑，松下団員

講　演　会

代表団は滞在中に下記の講演を行つた．聴講者は各分野の専門家で各会場とも 50～100 名の聴講者があつた．

1)　9月 24 日(月)　中国金属学会（冶金工業部）
日本鉄鋼協会の概要とその使命　　田畑新太郎
2)　9月25日(火)　北京鋼鉄学院
10月2日(火)　浙江省金属学会（杭州西冷賓館）
日本における製鋼物理化学研究の進展
松下　幸雄
日本における製銑製鋼の連続化に関する研究
中川　龍一
3)　9月27日(木)　北京鋼鉄研究総院
10月4日(木)　上海金属学会
日本における鉄鋼材料研究の進展
田中　良平

4) 9月29日(土)　東北工学院
固体電解質の応用に関する最近の研究
後藤　和弘

9月27日(木)午後から北京鋼鉄研究総院で，松下，中川団員（9月25日）講演ならびに田中団員の講演に対する質疑があり，熱心な討論が展開された．

なお，北京における講演会では，中国金属学会の王之璽，呉路青，付君詔，邵象華，周栄章，林从煥等の諸氏が同行来聴された．

協定書調印と日本鉄鋼協会答礼宴

両会の3回に亘る協議の結果合意に達した「鉄鋼学術会議共同開催に関する協定書」の調印式が，9月27日(木) 18：30から北京市前門外にある北京烤鴨本店で行われた．調印は中国金属学会劉克剛，張文奇副理事長ほか会議出席者など関係者と日本側代表団全員立会いのもと，王之璽副秘書長と田畑新太郎団長との間で，日中両国語の協定書に署名したうえ交換された．両会交流の礎となるもので互に発展を誓い拍手をもつて協定成立を祝つた．終つて両会からの記念品の贈呈が行われ，日本代表団からは七宝焼の壺と協会編集の鉄鋼製造法（全4冊）ならびに新版鉄鋼技術講座（全5冊）を，中国金属学会からはガラスケースに入つた梅と竹の鉄細工と中国金属学会「鋼鉄」誌および「金属学報」誌が，劉副理事長と田畑団長の間でそれぞれ贈呈された．

引続いて日本代表団の答礼の招待宴に移り，4卓に分れ有名な北京烤鴨料理を囲み，新しい友情の絆で結ばれた両会の交流が発展を遂げることを念願し，なごやかな雰囲気の中で楽しい交歓が行われた．中国側からは9月23日（日）の招待宴の出席者に加え，王元方，周応仁，林从煥，肖永誠，佟麗娟の方々が出席した．（佐藤公昭）

田畑智世枝夫人のピアノリサイタル

第1回目　9月24日（月）14:30より
北京中央音楽院大ホールにて
第2回目　10月1日（月）14:30より
瀋陽音楽院大ホールにて

1979年3月北京鋼鉄学院に集中講義に行つた折，今回の中国側の実際上の仕事を一切してくれた周栄章教授に田畑夫人のピアノリサイタルをしたら楽しい日中親善になるかもしれないと言つておいた．同先生は金属工学者なので音楽家には知合いがなかつたので，全くの正攻法で中国文化部と交渉のすえ，中国で一番レベルの高い北京中央音楽院が正式のホスト役を引受てくれることになつた．当日はリハーサル，照明の打合せ等の後に14:30より開演された．聴衆はピアノ科の学生約300人で，音楽

写真3　協定書の調印式
上．協定書に調印する王副秘書長と田畑団長
下．協定書を交換して握手する両代表

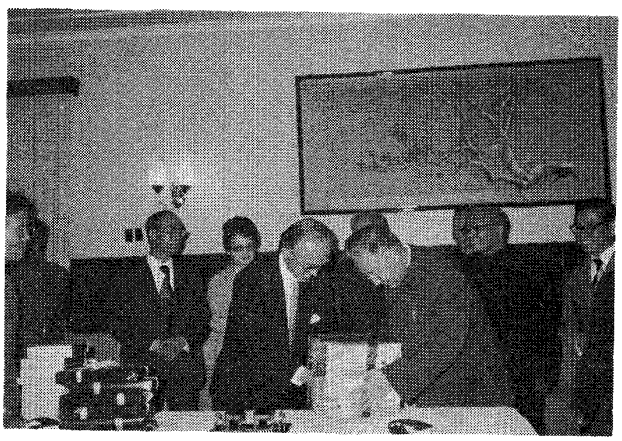


写真4　記念品の贈呈
上．劉副理事長より梅の鉄細工を受ける田畑団長
下．田畑団長より七宝焼を受ける劉理事長

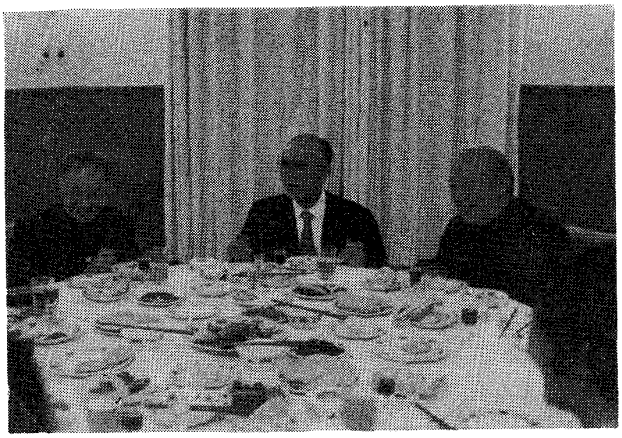


写真5　答礼宴のひとこま
左から劉副理事長，田畑団長，張副理事長

院の王元方院長先生やピアノ科の主任の周応仁先生による挨拶と田畑夫人の海外での演奏歴の紹介の後はじまつた．プログラムは以下の通りである．

Scarlatti　Sonata E Major
Debussy　Children's Corner
Doctor Gradus and Parnassum
Jumbo's Lullaby
Serenade for the Doll
The Snow is Dancing
The Little Shepherd
Golliwogg's Cake-Walk
Toru Takemitsu Triste
Liszt　Concert Etudes
Gnomen-Reigen
Un Sospiro

聴衆は中国の誇る北京中央音楽院のピアノ科の学生であり，田畑夫人の指の動かし方を“学習する”態度で熱心に見ていた．曲の終りごとに熱烈な拍手で，文化大革命の間に荒廃した芸術界の中ではじめての北京中央音楽院主催の日本人ピアニストのリサイタルらしく聴衆の感激ぶりが我々にとつて大変印象深く感じられた．

また田畑夫人の演奏後，ご教授を頂きたいということで小学生の潘淳君，中学生の諶丹君，呉梅隶さん，大学生の赵威君らがそれぞれ短い曲をひいた．この中で特に潘淳君は実にやさしい曲目をひきながらその深い音楽性を発揮してピアノが独りで唱い上げているような演奏をした．リサイタル終了後，田畑夫人を囲んで，御批評を頂く会を催し，田畑夫人は4人のそれぞれに具体的に適切なアドバイスをされた．田畑夫人も潘淳君は特にほめていられた．

場所は変つて瀋陽では国慶節の10月1日14:30より瀋陽音楽院の大ホールで同じようなリサイタルが開催された．

曲目は上記とほとんど同じで聴衆もピアノ科の学生約300人であつた．学長の丁鳴先生とピアノ科の陳教授は田畑夫人と同じ東京の武蔵野音楽大学を卒業された由で大変よろこんで下さつた．

北京と瀋陽の両方のリサイタルには中国金属学会の方々が皆出席され，日中親善になごやかな面をかもし出していた．また田畑夫人はこのピアノリサイタルのため婦人プログラムの参加を一切やめ体調の調整と精神統一につとめられ，日本人団員一同や中国金属学会の方々に芸術のきびしさの一端をかいまみせて下さつた．

なお後日談になるが，中国金属学会から冶金工業部と各大学や各鉄鋼公司への正式の報告書にこのピアノリサタルの詳細が報告され，中国金属学会としては田畑夫人の日中親善の努力に対し絶大な感謝の意を表したとの由である．　（後藤和弘）

9月28日（金）北京の西北方にある頤和園を訪れた．前面に人造の昆明湖，背後に万寿山を配し，42ヘクタールの広さで湖は全面積の3/4を占めている．東宮門から入り，3階建ての大舞台の徳和殿を過ぎると湖を左に見ながら700mに及ぶ長廊が続き，右は万寿山を背に数十の楼閣，殿堂が松，柏などの老木の中に立ち並びその頂点は頤和園のシンボルである山頂の仏香閣に達しすばらしい景観を示している．長廊の行着くところに大理石製2階造りの船「清晏舫」がある．園内は北京市民あるいは旅行者の憩いの場であり湖にボートを浮べる人家族連れで仲間同志散策している姿が多かつた．頤和園からの帰り北京大学の構内に立寄つた．広い敷地に校舎が点在して中央部に柳の緑に囲まれた池があり水面に高い仏塔がゆらぎ映えていたのが印象的であつた．

28日で北京の日程をすべて終え旅行の行程となる．夜22：30北京発の寝台快速列車で瀋陽に向け出発，中国金属学会から付君詔副秘書長，周栄章教授，黄協浦通訳が同行して下さることになつた．列車内は1ボックス4人，上下2段の向い合いになつていた．乗客専務の若い女性がお茶のサービスをしてくれた．眼がさめると列車は高粱畑の中を走りつづけていた．9月29日（土）8：00すぎ瀋陽に到着，遼寧省金属学会劉振華氏，高甫

写真6　頤和園を訪れた代表団
（随行は林从煥氏，余景生氏）

堂氏らの出迎えをうけ，待合室で日程を聞き宿舎の遼寧大厦に直行，朝食を取り直ちに第一の訪問先瀋陽重型機械工場に向つた．工場に着くと事務所の入口に「日本鉄鋼協会代表団熱烈歓迎」の立看板があり，見学した各現場の入口も同様であり，労働者から拍手を以つて迎えられた．

瀋陽では国慶節を迎の時期であつたせいと思うが，工場の塀，街角に近代化の達成，生産の昂揚を趣旨とした各種のスローガンが見受けられ，北京のそれと異なつた工業都市の雰囲気を漂わせていた．

夕方は遼寧省金属学会主催の招待宴が遼寧大厦で催され，宋尚文理事長ほか李華天，劉振華，郝松岩，林忠波，高甫堂ならびに北京から同行の3氏が出席された．

9月30日（日）遼寧省革命委員会訪問と建国30周年記念祝賀会招待の日程が午後に組込まれ，車で往復した瀋陽から160 km離れた鞍山鋼鉄公司の見学もあわただしかつた．

16：00 に遼寧省革命委員会を訪ね，王遼寧省常務委員，革命委員会副主任をはじめ省幹部と面会，建国30周年と中国の発展に敬意を表した．続いて遼寧賓館で開催の建国30周年記念祝賀会に出席した．会場までの道路は祝賀会出席者を乗せた車が数百メートル連なつて non-stop で走行した．祝賀会には日本をはじめ数カ国の瀋陽地区滞在者が招待されていた．主催者の挨拶後，山海の珍味が食卓を賑わし盛況であつたが，建国30周年記念行事は質素に行われている感じであつた．

終つて観劇に招待され，中華劇場で旅大市京劇団の演ずる京劇の繊細かつダイナミックな演技を堪能した．中国各地に多くの京劇団があつて活躍していると聞いていたが，実際に見てその迫力に圧倒された思いがする．

10月1日(月) 国慶節を祝い労働者は仕事が休みとなり公園は人の波で一杯であつた．午前北陵公園を見学したが，園内で労働者，学生などによる音楽会，体育演技などが行われ多くの人々を集めていた．午後は瀋陽音楽院で田畑団長夫人のピアノ演奏会が開かれた．また松下，中川，佐藤団員は瀋陽郊外の高坎人民公社を訪問した．

夕刻 19：59 の列車で瀋陽を出発するに先立つて，日本代表団主催の答礼宴を 17：00 から遼寧大厦で開催した．田畑団長から滞在中の暖い歓迎と厚意に謝意を表し，宋理事長から次回は長期滞在を望む挨拶があつて，列車の時間に制約されながらも楽しい一時を過した．遼寧省側からは先の招待宴の出席者に加え，瀋陽音楽院の丁鳴院長と陳汝黄，楊孝毅の3氏が出席した．

10月2日（火）6：25 瀋陽からの寝台列車は雨のあがつた北京に着き，車で直ぐ北京空港に向い，空港で朝食を取つた．空港には呉路青女史，邵象華氏，林从煥氏などが見送りに来られ，歓談の後 9：50 発の杭州行の飛行機で北京を後にした．杭州では浙江省金属学会の韓恒余理事らの出迎えをうけ直ちに西湖に面した宿舎西冷賓館に入つた．午後西湖遊覧後 15：30 から松下，中川両団員の講演が宿舎内のホールで行われた．

夕方は浙江省金属学会招待宴があり，王啓東浙江省金属学会副理事長ほか韓恒余，向晨，李漢周，余華興の諸氏が出席，西湖をめぐつての話題は楽しかつた．

10月3日（水）の夕方 18：00 に杭州を出発 22：00 に上海着，陳錫昌上海金属学会秘書長らの出迎えをうけ宿舎の錦江飯店に入つた．

10月4日(木) 8：30 に宿舎を出発，田中団員は上海金属学会に赴き講演を行つた．他の団員は上海第五鋼鉄廠の見学に向つた．午後は全員遊覧船に招待され黄浦江の左右に展開する上海市街，工場地帯，港に中国の一大中心地としての息吹きを感じた．船に乗つて約1時間後に折返点の長江（揚子江）との合流点に達し，対岸の見えない河幅に，悠久なる水の流れに中国の広大さをいまさらながら感じた．折返して右側，長江沿いに宝山製鉄所の建設地区を遠望した．夕方上海金属学会招待宴が錦江飯店で開かれた．上海金属学会から陳元慶副理事長陳錫昌，馮碧華，韓山宛，林棟梁，呂孝濬，朱玉琪，徐博美の諸氏ならびに北京から同行された付君詔，周栄章黄協浦の3氏も出席された．中国での最後の夜であり，話題は2年後のシンポジウムまでに及び和気靄々交歓が重ねられた．

なお，宴の開会に先立ち，中国金属学会葉志強理事長から業務の都合で日本鉄鋼協会代表団と会えなかつたことについて田畑団長，松下副会長宛に丁重な書面が届けられ付君詔副秘書長を通じて紹介された．

10日5日(金) 中国における全日程を無事に終え，帰国の途につく，上海空港には我々の中国滞在中常に行動を共にして下さつた中国金属学会付君詔副秘書長，周栄章教授，黄協浦通訳をはじめ上海金属学会の方々が見送りに見え，新らしい両会交流の発展と友好を願い，再会を誓い合いあつた．

上海発 10：00 CA 923 便は順調に飛行し，快晴の桜島を真下に，開聞岳を眺望におさめ 14：25 無事成田空港に着いた．

（2） 日　程

9月22日(土)	19:40	北京着（成田発 15:35） （宿舎民族飯店）
23日(日)		万里の長城，明の十三陵見学
	18:30	中国金属学会招待宴（北海公園仿膳飯庄）
24日(月)	8:30	中国金属学会（冶金工業部会議室） 1) 田畑団長講演 2) 第1回中国金属学会・日本鉄鋼協会会談
	14:30	田畑夫人ピアノリサイタル（北京中央音楽学院）
	午前	婦人プログラム（北京首飾庁）

25日(火) 8:30 北京鋼鉄学院
1)午前 松下，中川両団員講演
2)午後 学院内見学
16:30 中国金属学会（冶金工業部）
第2回中国金属学会・日本鉄鋼協会会談（田畑，松下，後藤，佐藤団員）
16:30 天壇公園見学（中川，田中団員，婦人）
婦人プログラム（繍物刺繍工場）
26日(水) 8:30 中国金属学会（冶金工業部）
第3回中国金属学会・日本鉄鋼協会会談
15:30 故宮見学
18:30 観劇（バレー，工人倶楽部）
27日(木) 8:30 北京鋼鉄研究総院
1)午前 田中団員講演，院内見学
2)午後 松下，中川（9月25日講演），田中各団員講演に対する討論
18:30 中国金属学会，日本鉄鋼協会，「鉄鋼学術会議共同開催に関する協定書」調印式
日本鉄鋼協会答礼宴
（北京烤鴨本店）
28日(金) 8:30 頤和園，北京大学見学
14:30 市内見学（飾物工場，王府井，友誼商店）
22:30 北京発→瀋陽（寝台列車）
29日(土) 8:16 瀋陽着（宿舎遼寧大厦）
10:00 瀋陽重型機械工場
14:00 東北工学院
1) 後藤団員講演
2) 学院見学
18:30 遼寧省金属学会招待宴(遼寧大厦)
婦人プログラム(玉，羽根の工場)
30日(日) 9:00 鞍山鋼鉄公司
婦人プログラム（湯崗子温泉）
16:00 遼寧省革命委員会表敬訪問
17:00 遼寧省革命委員会主催「建国30周年祝賀記念晩さん会」（遼寧賓館）
19:30 京劇観劇（中華劇場）
10月1日(月) 午前 北陵公園，遼寧工業展覧館見学
午後 1)東北工学院（田中，後藤団員）
2)田畑夫人ピアノリサイタル（瀋陽音楽院：田畑団長，松下夫人中川夫人）
3)高坎人民公社（松下，中川，佐藤団員）
17:30 日本鉄鋼協会答礼宴（遼寧大厦）
18:59 瀋陽→北京（寝台列車）
2日(火) 6:25 北京着
9:50 北京発→杭州（航空機）
11:40 杭州着（宿舎西冷賓館）
14:40 西湖遊覧
15:30 浙江省金属学会（西冷賓館）
松下，中川団員講演
18:00 浙江省金属学会招待宴
3日(水) 霊隠寺，虎跑泉など見学
18:30 杭州→上海（列車）
21:45 上海着（宿舎錦江飯店）
4日(木) 午前 上海金属学会
田中団員講演
9:30 上海第五鋼鉄廠
午後 黄浦江→長江（遊覧船）
18:00 上海金属学会招待宴（錦江飯店）
5日(金) 10:00 上海発→帰国（成田 14:25）

（佐藤公昭）

3. 訪　問　記

1) 北京鋼鉄学院

訪問日時：9月 25 日（火）8：30～15：30
応待者　：張文奇院長，魏寿昆副院長，他

朝8時前にホテルを出発，マイクロバスでほぼ 30 分静かな緑の林の中にたくさんの建物が点在する北京鋼鉄学院に到着．2階の応接室で張院長ら学院幹部の先生方と会い，相互に挨拶を交換．この学院は 1952 年に創立され，卒業生はすでに 17,000 名を数え，現在の規模は学生数約 5,000 名，教官数約 1,200 名．学院では工場，鉱山などとも連絡をとつて研究を進めているとのことであつた．

8：45 から松下教授が季万林講師の通訳で約 70 分間，「日本における製鋼物理化学研究の進展」について講演，次いで 10：00 ごろから中川博士が王世鈞講師の通訳で同じく約 70 分間，「製銑製鋼の連続化」について講演した．聴講者は 60～70 名ほどかと思われたが，非常に熱心で強い意欲が感じられた．

講演終了後，しばらく休憩歓談の後，ホテルに戻つて昼食をとり，午後再び鉄鋼学院を訪ね，研究設備を見学した．溶鋼の酸素活量，スラグの粘度，三元合金の表面張力，その他いくつかの研究室を廻わり，また引上げ法による Si 単結晶の製造やそれのX線トポグラフによる研究など，多彩な研究の一端を見学した．X線装置はジーメンスと理学電機（Rotaflex）など，またチェコ製の 100 kV 電子顕微鏡や英国製の走査型電子顕微鏡というように，各国の設備がおかれ，日本のものが必ずしも多くないことが少々気になつた．また，金へんの元素名がたくさん並んだ周期律表が珍しかつた．

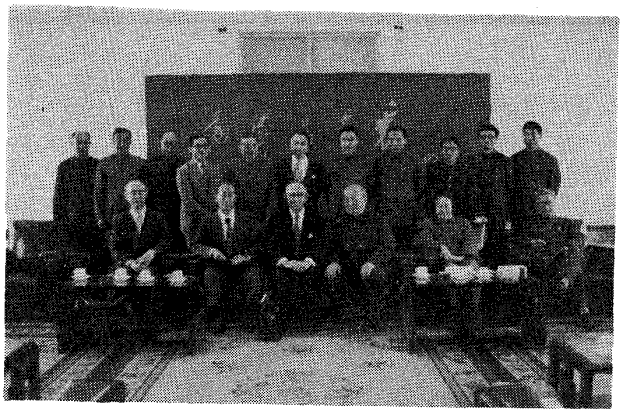


写真7　北京鋼鉄学院の応接室での記念撮影

かなり大きな規模の圧延実験工場やコンピュータ関係を見学した後，最後に周教授の製鋼研究室を訪問したが，ここでは容量 100 kg の Q-BOP（底吹転炉）の設備があり，150 kg の高周波炉で溶銑を得て実際に吹錬の実験を行つているという説明を受けた．また，LD 転炉でのガス流速の分布を測定するという大がかりな研究設備も見学した．いずれも見掛けは立派ではないが，文化大革命の困難な環境の中で，苦労しながらコツコツと作り上げたとのことであり，その熱意と努力に感激を覚えるとともに，研究水準の高さに敬意を表したことであつた．

鋼鉄学院を辞してから，ご夫人達と合流して，王世鈞，李万林両氏の案内で，1420 年，明の時代に造られたという天壇(Temple of Heaven)公園を夕暮れまで見学した．

（田中良平）

2)　北京鋼鉄研究総院

訪問日時：9月 27 日(木)　9:00～15:00

応待者：全鉦嘉第1副院長，邵象華副総工程師，唐仲和製鋼研究室長，趙林春軋鋼研究室主任，他（北京鋼鉄学院助教授韓其勇）

北京西郊外の広大な土地にポプラの大樹にかこまれて堂々とたつている冶金工業部の研究所である．ついてすぐに第3楼の貴賓室に案内され上記の如き応待者から研究所の組織，研究内容などについて説明があつた．つづいて，田中良平教授の「日本における鉄鋼材料研究の進展」について約100人の聴衆をあつめて講演会があつた．講演はよく整理されたスライドとユーモアをまじえて行われたので，熱心な聴衆は大変深い感銘をうけているように見えた．

その後，研究所内の見学があつたが，研究所内には，約2,800人の人々が働いており構内に住宅，病院，小学校，売店などすべて完備している．センジミア－20段ロールを自作し，世界一の薄板をつくつている研究室や，ESR や真空アーク炉などのある製鋼研究室を見学したが，研究所の建物や研究費の大きいことには大変感銘をうけた．

また酸素濃淡電池の研究は特に純白の固体電解質を用いてスラグ中の Nb_2O_5 の活量を測定しようと考えていたり，また溶鋼はもちろんスラグ中の P_{O_2} を測定しており，筆者らも日本で研究を早く完成しないと先をこされる恐れをいだいた．このような実験をしている所には朱果灵と皇甫慶茹という2人の上品な婦人が働いていて室内が実にきちんと掃除され，行くとすぐお茶を出してくれたので大変感激した．

またこの研究所には 1981 年秋に予定されている第1回日中共同シンポジウムの中国側の実行委員の1人である，外国で有名な邵象華先生がいてその件についてもいろいろと話がはずみ，邵先生の下の唐仲和先生が幹事的な仕事をするからよろしくという話であつた．

研究所見学の全般的印象は1）研究設備が大きく立派である2）研究者のレベルが高いの2つであるが，何故これだけ良い研究をしていながら日本に，そして外国に研究成果が知られていないのかが全く残念であつた．今後の国際的活躍を期待している次第である．

（後藤和弘）

3)　瀋陽重型機械工場

訪問日時：9月 29 日(土)　10:00～12:00

応待者　：張副工場長，他

前夜北京を離れ，快速夜行列車で9時間半，朝 8:00 すぎ瀋陽に着きホテルに荷物を置くや否や，ここの訪問が真先に日程に組まれていた．しかし，中央都市の北京と異なり，東北地方の風土のなかで，工場では文字通り熱烈歓迎を受け，いたるところ拍手と“歓迎日本鉄鋼協会代表団”の立看板であつた．

工場は 40 年前に建設され，現在は道路をはさんで 20 工場，人員は 11,000 名（うち，工程師 500 名，技術員 1,000 名，他は工人である），敷地 120 万 m²，建物 48.6 万 m² である．その内容は，製鋼（OHF 40 t × 3, EF 5 t × 1），鋳造，鍛造，熱処理，機械加工，保全，動力などであり，生産ラインは次の3つに大別できる．

（1）　鉱山，冶金機械

粉砕機，ボールミル，焼結機

写真8　北京鋼鉄研究総院で講演する田中団員（前より中央全副院長，右に呉路青女史）

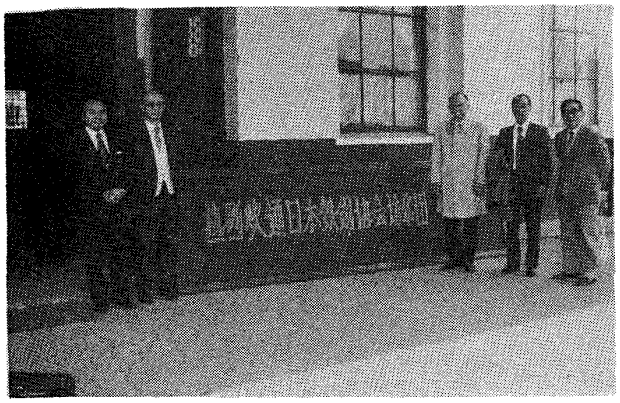


写真9　熱烈歓迎の看板を囲んで
（瀋陽重型機械工場本部玄関前）

（2）　鍛造機械

6,000 t 水圧プレス，12,500 t 押出機，4,000 t プレス，その他自由鍛造機

（3）　圧延機

ホット・ストリップ・ミル精整ライン，形鋼圧延機，中形分塊圧延機，シャー（2,500 t）

われわれが見学したのは，鋳鋼品やロールの研削，水車インペラ（45,000 kW 用，鋳鋼品で約 90 t），3,200 t 水圧プレス，開発中の 1,250 t 水圧横型押出機（アルミニウム用），ロール径 850 mm の圧延機（年間生産能力 140 万 t，唐山製鉄所向けとのこと）およびボールミルなどであるが，自力更生の激しい意欲に認識を新たにした．（松下幸雄）

4）　東北工学院

訪問日時：9月 29 日（土）　14:30～17:00

応待者　：畢克楨副院長，李華天副院長，遼寧省金属学会副理事長，他

この学院は 1949 年に創立され，卒業生はすでに約 25,000 名，現在の学生数は約 6,500 名である．学科は鉱山，鉄冶金，非鉄冶金，機械，材料科学，自動制御，及び力学の 6 つであるが，将来は数学，応用数学，工業力学，工業物理学なども増設したいとの話であつた．教授，助教授は 98 名，860 名ほどのインストラクターも含めて約 1 300 名の教員が 70 の教員室（日本の大学の講座より少し大きい組織と言えよう）に分かれ，また50の学生実験室がある．

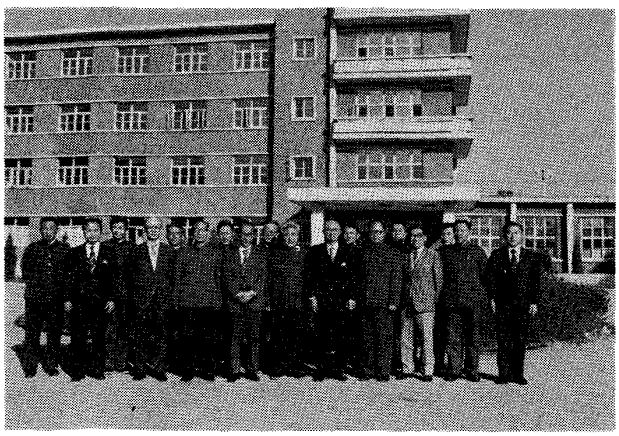


写真10　東北工学院関係者との記念撮影

15:00 ごろから約 40 分間，後藤団員が「固体電解質の応用に関する最近の研究」を英語で発表した．

講演の後，学生実験室や研究室を見学．まず鉱山学科では坑道の換気設計に関連する通風抵抗の測定設備に案内されたが，長さが 20 m 以上もあり，学生実験用としてはかなり大掛かりなものであつた．次いで防塵のための沪過材料の実験設備，また鉄冶金学科では，シャフト炉やロータリーキルン，スラグの粘性測定の研究設備などを見学した．

4 時半過ぎ，見学を終えた後，1979年春から東京工大に客員研究員として滞在している当学院の金応培講師の留守宅を訪問した．短い時間ながら，奥さんと 2 人の子供さんと歓談し，お茶，お菓子，果物などをご馳走になつた．ここに記してお礼を申し上げたい．（田中良平）

5）　鞍山鋼鉄公司

訪問日時：9月 30 日（日）　9:00～13:00

応待者　：薪漢鞍鋼煉鋼副総工程師，他

国慶節の振替えで，本日は出勤日である．瀋陽から南下して車で 2 h かかる．午後の行事（遼寧省革命委員会の招待）が予定されているので，あわただしい日程であつた．ここは，鞍鋼の略称で知られる中国屈指の鉄鋼コンビナートであり，粗鋼年産は昨年度 686 万 t ということで，主要製品は鋼板，鋼管，形鋼，線材である．工場敷地は，瀋陽から旅大に向う鉄路に沿つて北東に拡がり，主要工場の占有面積は，1,600 万 m² (敷地，2,400 万 m²) である．その人員は約 10 万，鉱山を含めると約 22 万ということである．当所は，日本の鉄鋼関係者が数多く訪問してよく知られているので，われわれの見学した範囲での印象のみ記すこととする．

（1）　第 7 高炉

1977 年に，自力で設計，製作され，内容積 2,580 m³，銑鉄日産は 4,400～5,000 t（コークス比 0.48～0.49，重油 37～40 kg/t）である．装入は 3 ベル，焼結鉱とペレットは 9：1，送風量は 5,000 Nm³/min，温度は 1,060 °C，外燃式熱風炉 4 基を備える．銑鉄組成は，Si 0.5%，P 0.02%，S 0.01～0.02%，出銑温度 1360°C，スラグ塩基度は 1.15 である．労働環境は決してよくないが，技術水準は高いと思われる．

（2）　第 3 製鋼工場

OHF は固定式 370 t が 5 基（3/5），BOF は 150 t が 2 基（1/2）である．OHF は，屑鉄装入 36%，出鋼～出鋼の間隔 10.5 h，天井煉瓦は MgO-Al_2O_3（Al_2O_3<10%）を使用している．BOF は，溶銑注入を見学したにとどまる．造塊は，台車下注ぎで，鋼塊は 10.7 t，リムド 80%，キルド 20% であるが，第 2 製鋼工場（傾動式 OHF のみ）はその比率が逆である．注入前に，鍋の溶

鋼をスラグで攪拌して温度調整をしていたようである.

(3) 第2分塊工場

ロール径 1,150 mm の分塊,スラブ圧延機と連続ビレット圧延機を備え,年産 400 万 t の実績を挙げている.これに続いて,半連続ホット・ストリップ・ミル (1.8, 1.02 mm) と3段厚板圧延機を見学した.

以上,極めて短い時間内ではあつたが,主力工場ないし設備を見学することができ,勤労意欲のたかいこと,謙虚に先進技術を学ぶ姿勢がありありとみえることを評価したい. (松下幸雄)

6) 上海第五鋼鉄廠

訪問日時:10 月4日(木) 9:30～10:30

応待者 :楊子寧技師長,他

いよいよ最終の日程である.上海市の中央より北上して車で約1 h,黄浦江沿いに第1鋼鉄廠を過ぎると,この特殊鋼専業の第5鋼鉄廠がある.

ここは 1958 年創設で,現在年産 100 万 t,アーク炉と横吹き転炉で半々に溶製されている.人員は 18,000 名,主要製品はステンレス鋼と軸受鋼である.

製鋼工場は3つで,2つがアーク炉 (24 t ×7, 1基トランス容量 9,000 kVA),1つが横吹き転炉 (8 t ×4) である.加工工場は9つあり,分塊,形鋼,鋼管,薄板,鍛造,付帯その他で,研究所を備えている.当初の予定では,研究所,アーク炉,鋼管を見学することになつていたが,午後の行事との兼合いで鋼管工場は割愛された.

(1) 研究所

ここは試験機と特殊溶解炉を備えている.前者では,1975 年に設置したインストロン (引張圧縮, 10 t),アムスラー高サイクル疲れ試験機,英国製の疲れクリープ試験機 (900°C, 2台),曲げ試験機 (西独製1台と自力製作のもの6台,室温～1,000°C),現在工事中であるが中国製のクリープ試験機 140 台(計算機制御),疲れ-クリープ試験機 (900°C) などがある.

後者では, 10 年前に設置した英国製 VIF (10^{-3} mm Hg, 1.3 t, MgO るつぼ) でステンレス鋼をつくつており,ヘラウス製 VAR (炉体2基, 18,000 kW, 7～10 t 660 mmϕ ×3,500 mm) ではチタン・インゴットをつくつている.

(2) アーク炉工場

含 Ni, Cr, Mn の構造用鋼を溶製していたが,溶解精錬時間は4 h とのことである.

以上,素通りに近くて,見学後の討論時間が持てないことは残念であつたが,熱心に案内して下さつた関係者に厚く感謝する. (松下幸雄)

7) 婦人プログラム,その他

北京の三日

昨9月 22 日夜 19:40 北京空港到着.東京のむし暑さに比べ,ヒンヤリした空気が肌に心地良い.不安と期待で一ぱいだつた私も,暖かい出迎えと,同乗した通訳の佟さんのはつきりした折目正しい日本語にホッとした.

万里の長城・明の十三陵

23 日,今日からいよいよ中国での第一日が始る.今日は日曜日,我々の日程は「万里の長城と定陵見学」.9:00ホテルのロビー集合,中国側から,周先生,林先生,黄さん,佟さんと我々9人がトヨタのマイクロバスに乗る.北京の西北約 80 km,途中一寸した渋滞もあつて2時間以上かかつて,八達嶺の麓に着く.バスやタクシーのターミナルと,売店,便所などあり大勢の人でごつたがえつていた.写真でよく見ていた万里の長城を目の前にして,いまさらながら規模の大きさ,風景の雄大さに,息をのむ思いだ.見渡す限り延々と続く壁, 6,000 km と言われているが,かすむ山々の頂きにその城壁を見, 2,500 年前から築城された偉大な歴史を肌に感じ,胸にこみあげるものがあつた.向つて右側から,急傾斜の石だたみを登り,あえぎつつ八達嶺の頂上まで上る.

八達嶺の山なみを天寿山に向つて車を走らせ,途中,後藤先生の提案で,「居庸関」で車を降りる.1300 年頃建てられた石門で,仏像と経文 (古代文字や,ヒンズー文字) が彫りこめられた歴史上有名な門との事,人影もなく,ひつそりとしたたたづまいに,初秋の日ざしが優しかつた.

再び車を走らせ 13 代に渡る明朝帝王の廟墓,「明の十三陵」に行く.参道の両側には,文臣,武臣等の石像,さらに獅子,駱駝,象,麒麟,馬等の石獣がずらりと並び,三々五々歩いている人々が,写真をとつている風景が見られた.一行は唯一の発掘された定陵に着き,休憩所で,お弁当をいただき, 14 代の万暦帝神宗 (1573～1621) が葬られているという地下宮殿に降りた.前殿を通り,開かれている大理石の美しい重い扉の先が中殿で,広い廊下のようにみえ,そこには,三脚の白玉の彫刻をほどこされた宝座があり,大きなかめが置いてあるのが目についた.通訳の方の説明では油壺 (仏前に供える長命灯) で,あかりにもなつていたようだ.つき当たりの後殿は,高さ 9.5 m,奥行き 9.1 m,幅 30 m の部屋で,大きな棺が3つ置かれていた.真中が神宗で,両隣が二人の皇后の棺で,いずれもふたがされていた.何しろ,見上げるような大きな棺で,我々の常識をこえた何もかも大ぶりなのには,驚くばかりだつた.後,定陵博物館で神宗の,金や宝玉までまばゆいばかりの宝冠や,純金で作られた日用品,茶碗,湯呑み,箸,また洗面器など見て,帰路に着いた.定陵が発掘されたのは, 1957 年で,十三陵の内, 2番目に大きな陵で, 1番大きい長陵の地下宮殿は,未だ発掘されていないと聞く.長陵をはじめ,十二陵の地下に眠つた文化財をおさめた天寿山を振返えると,山のあちこちに廟が見え,改めて中国の歴史の深さ規模の大きさを感じた.

北京首飾庁

24 日, 8:35 一同揃つて冶金工業部に,挨拶に行く.

中国側の紹介と，我々の紹介をすませ，私達婦人は通訳の佟さんと車で工場見学，順城街の，北京首飾庁に行く．庁長の陳さんの説明で，1952 年に建てられ，始めは京劇のコスチュームを作る為に出来た工場で，200 人位が，働いていたが，現在は人員も増し，高度な技術を要する飾物，置物を作つている．原料は，すべて白銀で，始めから終りまでハンドメイドの美術工芸品を大多数若い女性の手で作つていた．白銀のボディの上に，薄い銀箔をデザインに合せて，カットしてはりつけ，ボリュームを出し，塗料をぬり，焼きつけ，美しい七宝焼となり，純金でデコレーションをほどこし，極彩色の飾物が出来上る．

繍物刺繍工場

翌 25 日，レディス・プログラムは，光華路にある，繍物刺繍工場に行く．人員 800 人，85% が女性，下請けは，1,000 人位で，製品は 100 種類，主に，テーブルクロス，ベッドスプレ，ピロケース，ナフキンなどの，アップリケと刺繍，すべてハンドメイドで，中級品はほとんど日本への輸出，最高級品はヨーロッパとのこと，工場を，一まわりして，デザインおこし—試作—生産の過程を見せてもらう．若い女性が大部分で，一針・一針，丹精をこめて作つていた．

昨日の飾物工場と共に，中国人の伝統的な繊細な技術が，若に女性の手で，受けつがれ，すべて手造りで出来上る製品には，すばらしい味わいと，高いテクニックが見られ，日本では，もう考えられない昔からの技法が，中国で，根をおろしている現実に，目をみはつた．これらの伝統的な技術が，近代化を急ぐ中国で，機械に取つて替えられないよう，祈りに似た気持ちで工場を去つた．（松下三余子）

故宮博物館

26 日，14:30 ロビーに集合して，マイクロバスで故宮見学に行きました．民族飯店から東に進み，長安街に面した天安門は，旧紫禁城の正面玄関とのこと，その壮麗な城門を北に進むと，故宮博物館の正門，午門がありました．明，清朝の皇城の正門は中国の象徴の様に高く大きく，重厚でした．午門を潜ると，一面に白大理石で舗装された中庭が，大きく開けていました．総大理石の反り橋を渡り，大和門前に出ます．故宮の正殿である大和殿の楼門で，高さ 4 m の基壇に 5 道の階段がかかつています．その中央が皇帝専用の道路とされ，竜と鳳凰を彫つた一枚岩の大理石でした．一対の青銅の唐獅子は，中国最大とのことです．大和殿は間口 66 m，奥行 33 m，これも中国で最も大きい木造建築物．二層の黄瑠璃瓦が，青空と，広場の白大理石の間にはさまれて，とても美しく印象にのこりました．大和殿の中は金箔やうるし塗の大柱，紫壇の透し彫りの大衝立，王座や金銀の燭台など帝王趣味の権化の様です．そのうしろにはまだ沢山の宮殿が東に西に北に，屋根々々が折重なつて見えました．次は珍宝館です．石器時代から清朝末期迄の貴重な芸術品，二千点余りを見て回りました．玉器，青銅器，漆器，彫刻，錦織，絵画など沢山の展示品の中で，深く澄んだ翡翠の色が目にのこつています．次に見たのが九竜壁です．黄，緑，碧，紅，紫などの色で玉と遊ぶ 9 頭の竜を浮彫したものです．皇帝の権威の象徴との説明を受けました．故宮見学は，絢爛豪華な一連の絵巻物を見る思いでした．

北側の門を出た目の前には景山がありました．紫禁城の周囲に堀つた河の土を盛り上げた山だと言われていて北京市内が一望に見渡せるそうです．

夜は，五道口工人倶楽部でバレー見学．市内を大分離れておりましたが会場は労働者の方々で一ぱいです．中国の方々と共に私達一行も共に一夜を楽しく過しました．（中川チイ）

高坎人民公社

訪問日時　10 月 1 日（日）13：30～17：00

応待者　孫高坎人民公社議長，他

中国訪問中一度は見たいと思つていた人民公社を訪れる機会を得た．傅君詔先生みずから中国語—英語の通訳兼案内役をして下さつたほか郝松岩，林忠波両氏も同行した．

瀋陽より東へ，見渡す限りの稲あるいは高粱畑の中を車で約 50 分，目的の高坎人民公社に着く．質素な会議室で孫議長から概要説明を聞いた．

この公社は中国でも規模の大きい方らしく，4,500 家族，約 20,000 人が 50 グループおよび 15 のサブグループに分けられている．面積は 28,000 ムー（1 ムーは 660 m²）で，主として米，高粱，ピーナッツを作つている．その他に 6 つの working shop があり，あとで我々もその一つの硫安工場らしきものを望見した．できる限り自給自足しようとの姿勢がうかがわれた．その他トラック 150 台，車 30 台と機械化も進められているようである．収入の点では，1978 年には労働者 1 人当たり 350 元/年，平均 125 元/年とのことで，北京での女性通訳が大学卒業後 3 年で 45 元/月 程度なので，そう悪くない現金収入と思われた．

公社の中には小学校 13，高校 2 があり，すべての子供がここで教育を受けられ，さらに医学校へ現在 6 人出しており，教育の面でも力を入れていることを強調された．

外へ出てまず案内されたのは小高い所に建つている揚水場であつた．鉄筋 3 階建程度の建物の中に 1,000 馬力のモーターでポンプを動かし，灌漑用水を水田に供給している．その丘から見渡す稲穂のたわわな水田も少し前までは荒地だつたそうで，革命以来稲作も 2 倍に増えたのもこのポンプのお蔭である．しかもこの揚水場はエンジニアの手を借りず，すべて自力で建設したのだと孫議長は胸を張つて言われた．以前毛澤東主席もこの公社に来られたと自慢されたのもこのような実績のためであり，我々が案内されたのもここが公社見学のコースにな

つているためであろう．したがつて平均的な人民公社はどの程度かはわからないが，孫議長のようないわゆる遣り手の人をリーダーに持つた成功例の一つであろう．

村落の一軒一軒の農家は赤れんが作りで，せいぜい二室程度の広さと思われた．しかし案内されたスーパーマーケットでは日用雑貨は種類も豊富で，なにより信じられないくらい物価が安い．ぜいたくはできないが生活は安定していそうである．子供達が集つて遊んでいる場所に行きあわせたが，カラフルな服装で親心というものはどの国でも変わらぬものだと感じた．

最後にりんご園に行き，もぎたてのりんごをごちそうになつた．りんごといつても梨に似た味で，親切に洗面器の中で洗つてくれるのだが，始めは遠慮していたものの，味のよさにひかれかぶりつき始めた．帰りに大籠一杯のりんごをお土産に，行きも帰りも変わらぬ笑顔と拍手に送られて公社に別れを告げた．（中川龍一）

杭州（西湖）遊覧

10月2日，瀋陽を昨夜 20:00 に出発した夜行列車は北京駅に 6:25 に着きました．まだ明けやらぬホームには出迎えの方々がおられ，親しいお顔との再会から長旅の疲れもいく分とれて，そのまま車で北京空港へ，軽く朝食をとり，10:00 発の飛行機で杭州空港に着いたのが 11:38 でした．空港に降りたとたん，日ざしはまばゆく暖かく南に来たことを感じました．休憩室で待つ間ふと見ると竹の椅子に白い繻子の衝立，お茶もグリーンティーに変つていました．車で宿舎へ行く路は広々と緑も美しく，行きかう中国の方の服装も紺やグレーから白にと明るくなつていました．やがて小高い所にある西冷賓館に入りやつとホッといたしました．

おそい中食をとり一行は中国の方の案内で西湖遊覧に出かけました．ホテルから西湖迄は直ぐ近く，さつそく遊覧船に乗つて湖を進みます．周囲は山々にかこまれ，湖のまわりはそれぞれ名だたる公園になつており，観光地保養地としてこれ以上の所はない位です．電池で走る船は音もなく湖面をすべり，そののどかさは北京，瀋陽，鞍山での緊張をやわらかくほぐしてくれました．西湖の回りは約 15 km，深さは 1.8 m とか，湖は蘇堤と白楽天の名に因む白堤によつて三つに分かれ，その白堤にかかる断橋の姿はのびやかで美しく西湖を一層引立てております．湖をさらに進んで一番大きい人工の島三潭印月に船を下りました．植物の宝庫の様な緑の中に色とりどりの花が咲き水面には蓮華が浮び，その間を右に左に続く朱色のランカン，この橋をゆつくり歩いて四季折々さぞかしと思いました．白壁に四季をかたどつたすかし窓では，皆様変るがわる記念の写真をとりました．浮世離れのような中国色の中でひと時をすごして船にもどり，此の湖面にうつる月の光はさぞ美しいことと想いました．

その次の中山公園は前と変つてたくましく，数百年の樹令を誇る松や桧の古木，竹林，モチの木，泰山木など丁度木犀の香りがただよう季節でした．

ひたいの汗と快い足の疲れを感じてホテルにもどりました．男の方は其のあとお仕事があり，夜は観迎の夕食会と杭州の1日目は暮れていきました．

杭州遊覧

10月3日西湖をとりまく名所旧蹟の一つ，1,600 年の歴史を持つ禅寺，霊隠寺に向いました．大きな自然林の中を西に進み，だんだん山に入つて行きます．絶好の気候のせいかここも観光客で一ぱいです．霊隠寺は歴史の年輪を思わせる古代建築で，仏像など朱と金と緑が織りなす芸術作品は数かぎりありません．

飛来峯，煙霞洞の石窟や石刻は 1000 年も経つていて，時の流れが生みだせる，ものさびた，たたずまいでした．

次にマイクロバスは“虎跑泉”に向いました．車窓の景色もなだらかになり，木々の色もやわらかく初秋の快よさです．ここの泉は昔，虎が爪を立てたら水が湧き出て来たと言う伝説にもとづいているようです．ミネラルを含む飲み水として珍重されていました．茶わんに一ぱい水を張つて，そこにアルミ硬貨を何枚も何枚もうかべて見せてくれました．この地方の名茶「竜井茶」は日本のお茶を思い出させてくれる様なとろつと甘く美味でした．

午後女性は友誼商会で杭州の産物を見学，繻子に代表される絹織物，西湖の風景等を織つた壁掛，見ごとな竹細工や竹の箸，筆や硯，それに先程の竜井茶などでした．早い夕食をすませて次の目的地上海に向つたのが 18:30 でした．緑と湖の杭州を後にしました．（中川チイ）

上　海

北京，瀋陽，杭州とかなり忙しい予定の旅行ではありましたが，その土地土地の異つた風土と，中国料理の味を楽しみながら 10 月 3 日夜，上海に参りました．4日は男性の方々は，早速工場見学，会議に出かけられ，松下夫人，中川夫人と私，3人は，用意されたレディスプログラムで，上海の町に出かけました．午前中は，新しく出来た中国の博覧会に案内されました．機械の陳列からはじまり，薬品，衣料等その他，大変興味深く，2時間余り見学致しました．その間，各々の部で，日本語の出来る若い方が現われて，細かく説明して下さり，この国の徹底したやり方に感心致しました．新しいイデーのもとに，これから発展して行こうとしている中国人の希望に溢れた，真面目な態度を伺い知ることが出来て，大変感銘を受けました．

上海のメイン通りの商店街は大勢の人に溢れ，北京，瀋陽などと同様に，自転車が道一杯に行き来していました．午後は男性方と合流して，船で長江(揚子江)まで参りまして，中国最後の日の楽しい遊覧でございました．長江は，その水は黄色に濁り，波が荒く海の様で，つく

づく中国と言う国の広大さを，いまさらの様に感じさせられました．（田畑智世枝）

4. 主要面接者名一覧

北　京

劉　克　剛　中国金属学会副理事長，秘書長
張　文　奇　中国金属学会副理事長，北京鋼鉄学院院長
王　之　璽　中国金属学会常務理事，副秘書長
　「鋼鉄」誌副総編輯
呉　路　青　中国金属学会副秘書長
付　君　詔　〃　〃
邵　象　華　〃　常務理事，「鋼鉄」誌副総編輯
　北京鉄鋼研究総院副総工程師
全　鉦　嘉　中国金属学会煉鋼学術委員会委員
　北京鋼鉄研究総院副院長
周　栄　章　中国金属学会煉鋼学術委員会委員
　北京鋼鉄学院教授
林　从　煥　中国金属学会工程師
李　春　富　冶金工業部外事司対外連絡処副処長
黄　協　浦　冶金工業部外事司通訳
肖　永　誠　〃　〃
佟　朋　娟　北京鋼鉄研究設計総院対外処通訳
余　景　生　冶金工業部鋼鉄司技術部
王　元　方　北京中央音楽学院院長
周　応　仁　〃　ピアノ科教授
魏　寿　昆　北京鋼鉄学院副院長
李　万　林　〃　講師（松下団員講演通訳）
王　世　鈞　〃　〃（中川団員講演通訳）
劉　嘉　禾　中国金属学会特殊鋼学術委員会主任
　北京鋼鉄研究総院副院長
唐　仲　和　〃　煉鋼研究室工程師
趙　林　春　〃　軋鋼研究室主任
張　樹　棠　〃　〃　副主任
王　玉　硯　〃　（田中団員講演通訳）

瀋陽・鞍山

王　　中国共産党遼寧省常務委員，革命委副主任
余　　遼寧省対外貿易，学術委員
孫　　〃　外事処観光局長
宋　尚　文　遼寧省金属学会理事長，遼寧省冶金局副局長
劉　振　華　遼寧省金属学会副秘書長
郝　松　岩　〃　工程師
高　甫　堂　〃　外事工作人員
林　忠　波　〃　処長
畢　克　楨　東北工学院副院長
李　華　天　〃　〃　遼寧省金属学会副理事長
張　　瀋陽重型機械工場副工場長
丁　　鳴　瀋陽音楽院院長
陳　汝　黄　〃　教授
楊　孝　毅　〃　〃
蘄　　漢　鞍山鋼鉄公司製鋼副技師長
李　志　杲　〃　科学技術館技師
曹　洪　斌　鞍山市外事弁公室
孫　　高坎人民公社議長
孟　　〃　副議長

杭　州

王　啓　東　浙江省金属学会副理事長，浙江大学副校長
韓　恒　余　浙江省金属学会理事
　浙江省冶金研究所煉鉄室副主任，工程師
向　　晨　浙江省金属学会秘書
李　漢　周　浙江省冶金研究所
余　華　興　〃　〃

上　海

傳　元　慶　上海金属学会副理事長
馮　碧　華　上海冶金局外事弁公室
韓　山　宛　上海冶金局
林　棟　梁　上海交通大学副学長
陳　錫　昌　上海金属学会秘書長
呂　孝　濬　上海金属学会
朱　玉　琪　上海市冶金工業局外事弁公室
徐　博　美　上海宝山鋼鉄総廠外事処
楊　子　寧　上海第五鋼鉄廠総工程師

（佐藤公昭）